

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 69 号

2013 年 12 月

## 日本薬史学会 2013 年会 (札幌) 開催報告

編集委員長 西川 隆

日本薬史学会 2013 年会が 10 月 5 日 (土)、JR 札幌駅近くの北海道医療大学サテライトキャンパス (アスティ 45 12 階) で午前 10 時から開催された。会場には全国から約 60 名の会員が出席した。一般演題の発表に先立ち、日本薬史学会津谷喜一郎会長および吉沢逸雄年会長から開会の挨拶が行われた。津谷会長は 2013 年会開催を担当する北海道支部の創立当初からの活動の歴史を紹介し、「2005 年に続き 2 回目になる今回の札幌での年会が活発な研究活動の場になることを願っている」と挨拶した。吉沢年会長はユーモアを交えながら挨拶し、そのなかで「本年会では特別講演 1 題、一般講演 12 題の発表があるので活発な討論を期待している」と述べ、最後に「楽しい一日を過ごして戴きたい」と結んだ。

一般講演 12 題のうち 5 題が午前中に行われ、1 題目から活発な討論が展開された。昼食・休憩時間を利用して日本薬史学会理事・評議員合同会議が行われた。午後からは北海道医療大学学長新川詔夫先生の特別講演「ヒト耳あか型遺伝子の発見とその医学的・薬理的・人類学的意義」に続き、一般講演 7 題が発表された。終始フロアから意見が出され熱のこもった討論が行われた。特別講演は難しい内容を極めて分かり易く話されたので、耳あかについて学問的に深く理解できたと話す会員が多く、大変有意義な内容であった。

興味深いすべての演題発表が終わった後、次回の

日本薬史学会 2014 年会長の九州大学医学部教授・笹栗俊之先生から 2014 年 11 月 22 日 (土) の開催で、翌 23 日 (日) は「薬史ツアー in Fukuoka & Saga」を予定しているとの報告があった。そして最後に「福岡は 11 月がベストシーズンなので多数のお出でを期待している」と挨拶、フロアからは大きな拍手で応えた。

閉会の辞は、北海道支部西部三省常任幹事が行い、予定通り午後 5 時過ぎに 2013 年会は盛会裡に閉会した。引き続き会場を京王プラザホテル札幌に移し、懇親会が開かれた。司会は同支部千葉博志常任幹事が務め、乾杯は名古屋から参加された日本薬史学会奥田潤常任理事の発声で賑やかに始まり、8 時近くに終了した。

すべての行事に北海道支部のきめ細やかな気配りが感じられた有意義な一日であった。以下に編集委員による 2013 年会の聴講記録など全行事を記す。



吉沢逸雄年会長の挨拶

## 日本薬史学会2013年会の特別講演を聴いて

編集委員 小清水敏昌

演題：ヒト耳あか型遺伝子の発見とその医学的・薬理的・人類学的意義

演者：北海道医療大学学長 新川詔夫先生

まずビックリしたのはタイトルにある「耳あか」である。これを用いて遺伝学的に研究を行い、人類がどこから生まれ、どのような経路で世界を移動して行ったかについて豊富なデータを基にして解説された。

もともと耳アカは殺菌作用、皮膚の保護、昆虫の侵入防止などヒトにとってプラスの面がある。ヒトの耳あかの型として湿性と乾性とがあり、湿性は乾性に対して完全優性を示す遺伝形質であるという。われわれ日本人は両方が高頻度（湿性15% 乾性85%）に見られる特異な民族である。日本人では乾性型の頻度が高い地域は九州北部から瀬戸内海沿岸から近畿に分布され、湿性型の地域は西南九州や東北地方にみられるという。耳あかを遺伝的に調べ、その発生地から万の単位の年数を経てアフリカから中国を経て日本に来たことを解明した。

この研究については、過去の日本人研究者の存在が大きかった。京都大の解剖学教授であった足立文太郎が諸民族の耳あかをを用いた遺伝学的な研究を行っており、1937年にドライ型とウエット型の分類について発表しているという。

遺伝子の突然変異が約4万年前に東北アジアでたった一人に生じ、その後長い年数をかけてアジア人全体に広がり、現在の各地の頻度分布は乾性人類集団の移動・拡散し定住したものと考えられる。

演者は2006年に耳あか型決定遺伝子を同定した。湿性及び乾性を含む混在家系を集め種々のゲノム解析を行った。日本人以外に100人種の耳あかを調べた。その結果、乾性型は中国、韓国、フィリピン、ボリビアなど南に行くに従いこの型が多くなる。

白人や黒人は、ほぼすべてが湿性耳あか型をもつ

のでこれがヒト耳あか型の原型だろうと思われるという。乾性耳あか型はアレル A のホモ接合体(AA) —180番目のアミノ酸がアルギニンで、湿性耳あか型はGGホモ接合体か、GAヘテロ接合体—180番目のアミノ酸がグリシンであることが判明した。耳あかをを用いて患者の遺伝子を調べ特定の薬剤に感受性があれば薬効を十分に発揮するオーダーメイド医療に応用できるのではないかと、耳あかなので採血など患者には侵襲行為がなく、安心して検体に利用できるメリットがあるとして講演を終えた。

大変難しい演題のヒト耳あか遺伝子の発見に関する内容を分かりやすく講演され、またフロアからの質問にも丁寧に説明され有意義な講演であった。

演者は、北大医学部を卒業後小児科医となり、その後長崎大（教授）で遺伝子を研究。数々の疾患遺伝子の単離に成功している。国際ヒトゲノム機構会員、米国NIH生命倫理委員などを歴任し日本人類遺伝学会賞などを授与されていることから、人類学者であるといえる。

なお、座長は今回の年会長であり北海道支部長でもある吉沢逸雄先生が行った。



講演中の新川詔夫先生

# 日本薬史学会2013年会 in札幌 発表報告記

編集委員 小清水敏昌、砂金信義

## 演題1 ホメオパシーの設立者サミュエル・ハーネマンの生涯

演者： ミハエル・シュルブレア(東京大学大学院薬学研究科・医薬政策学)

ホメオパシー (Homeopathy)なる造語を命名したドイツ人のサミュエル・スリスティアン・ハーネマンの医学的な業績の経緯とドイツ国内にある彼の足跡、マイセン、ドレスデンなどのドイツの町の美しい写真を示しながらの発表。医師でもあるハーネマンは、抗マラリア剤のキニーネの効果から検討を加え1796年に「ホメオパシー」と命名してその理論を公表したという。もともとギリシャ語で、ホメオス(似た、同種の)とパソス(苦しみ、病気)の2つから成る造語である。演者によるホメオパシーの文献検索の結果ではPubMedを用いた場合では61件で、医中央誌では288件。またハーネマンで検索した場合は12件が得られた。今後は更にこれらについて研究をして行きたいと述べ発表を終えた。

## 演題2 Gaper について—オランダの薬店の看板

演者： 石田純郎(岡山大学医学部非常勤講師)

オランダの薬店では、店の出入り口の頭上に人の顔を形どった物を掲げており、これを「Gaper」といい、オランダ語では「あくびをする人」の意味。薬局ではこのようなことはしていないという。演者はオランダへ行ってそれらの像を撮ってきた写真をスライドにして提示した。顔は男性のものが多くムーア人が主体とのこと。口を開け何かをしゃべっているようにも見える。しかも舌を出しているのが多く、中には舌の上に丸薬を載せているのもある。オランダでは薬店の目印として使用している店が多く、あくまでもデザインであり法的な面は無いとのこと。その歴史的な経緯と様々な形の面白いGaperを紹介した。

以上、2題の座長は島森美光先生が担当された。

## 演題3 天保飢饉における石見銀山領の救荒・疫病対策について(付:救荒植物としての「葛」)

演者： 成田研一(島根県薬剤師会江津・邑智支部)

昨年と同様なテーマで発表しているが、今回は石見銀山領での飢饉に対処する方法の一つとして「葛」を利用した救済について発表した。天保の時代(1833-39年)には全国的に大飢饉になり米一揆が多発。疫病のため死者が多くなり、あちらこちらの藩領では人口が減少。例えば津和野藩では75,000人いた人口が20%も減少し60,000人ほどになったという。「葛」は肥大した根を用いて薬用としているが、布を織るのに茎の皮を使い「葛布」そして柿本人麻呂の万葉集でも謳われているほど古代から存在していた。また「葛粉」が「西田葛」として将軍吉宗に献上されたという。引き続きこれらの歴史的な事柄について研究していく。

## 演題4 古代インドの薬学—バウアー写本第2部におけるハリータキーの記述について

演者： 夏目葉子(名城大学大学院薬学研究科)

演者は自身の研究活動として「よりよい薬物治療とは何か」というテーマを追求していると冒頭に述べた。インドでは古代から伝統医学が盛んであり、アーユル・ヴェーダもその著名な長寿に関する医



会場風景



学書である。英国軍人であったバウアーが1897～1912年の間に古代インド医学の教典を英訳したのを「バウアー写本」といい第1～7部まで纏めている。このうち第2部「ナーヴァニータカ」に収められている薬用植物の「ハリータキー」について発表した。調査して分かったことは、この植物はトウダイグサ科のアーマラカとヴィビータカと組み合わせされており、サンスクリット語で「3つの果実」を意味するトリパラーとしての処方内容であることが判明した。更に「ナーヴァニータカ」を再度調べたところ、新たに判明したのでトリパラーの処方内容、剤形、臨床応用を纏めてスライドに示した。今後も古代インド医学における患者に使用したと思われる薬物やその処方内容について研究していきたいとして発表を終えた。

以上、2題の座長は本間克明先生が担当された。

#### 演題5 日向薬 薬事始め(その15)一日向における種痘の歴史一再考(Ⅲ)若山健海著、嘉永西載「種痘人名簿」について(1)

演者： 山本郁男(九州保健福祉大学薬学部)ほか

演者は昨年も本テーマに関して発表をしている。演者らが研究・調査中で偶然に発見した「種痘人名簿」の信憑性については議論がある。そこで、今回はこの人名簿に記載されている人数、年代、性別、地域性など主として数値の面から分析を加えている。全体の人数は244名で男性69人、女性52人、不明123人(小児、子など)。年齢別から見ると1～18歳までにおいて、最も多い年代は2歳が19人、次いで4歳14人など。年代から見ると嘉永、安政や慶応年間で人数をカウントしている。こうしてカテゴリー別で人数を出して考察を加えた。これからもこの「人名簿」を更に分析し当時の種痘の状況の把握に迫りたい。

座長は八木直美先生が担当された。

#### 演題6 韓国の薬研の歴史

演者： 奥田 潤(名城大学薬学部)ほか

演者は韓国の国立許浚博物館の研究者と一緒に

「薬研(やげん)」に関して約40年間歴史的な面から研究をしている。韓国の国立歴史博物館関係の7カ所を訪問し、韓国における薬研の歴史や製材などを調査した発表。その結果、韓国で最も古いものは鉄製のもので10世紀の頃ではないかと云われている。これは国立扶餘博物館にあるという。これらの薬研のスライドを出し解説を加えた。材料が何からできているかを調べたが、18台のうち木製が8、鉄製が6、石製が4であった。鉄製であるが下の台は木製のものもある。あるいは両方とも鉄製のものもあるという。薬研の作製年代を考察すると、韓国では10世紀頃のから、わが国では16～17世紀頃ではないかと云われているという。

座長は西部三省先生が担当された。

#### 演題7 医薬品の一般名に関する考察(2)：受容体関連薬物の名称

演者： 三澤美和(日本薬科大学)

医薬品の一般名はWHO医薬品国際一般名称委員会によって国際一般名(INN; International Nonproprietary Name)として世界に公表されている。INNでは一般名の命名法として接尾語にstemを付けて表記されるようになっているが、stemは、薬理活性などの薬物群の共通する特徴を基に設定され、同効、同機序の薬物は同じstemを有する名称で示される。stemの総数は、1994年に272であったものが、2011年には大幅に増えており、新規薬物群の登場の年代と一致して推移している。受容体関連薬物のstemは、受容体サブタイプの発見に伴い増加し、現在85stemが設定されている。受容体関連薬物のstemについて命名の過程について考察しており、初期のstemは、先行して登場した薬物名を基に設定されているものが多いが、近年では受容体あるいは生体内のリガンドなどを関連させ、初めから薬理学的作用機序を意識して作成されることが多くなっている。そして命名の具体例を示すと共に、それらから薬理作用の類推が可能で、stemを理解することは薬理学の理解にも繋がるとしている。

## 演題 8 医療費の抑制と薬価基準の見直しの経緯 -1985～2010にかけての薬価制度の論議 の経緯-

演者： 横山亮一、松本和男（日本薬史学会）

「売り手」と「買い手」がはっきりしない薬価について、基準の設定の原理について紹介し、これまで幾度も見直しが行われてきた薬価制度のについて、1950年の統制価格から薬価基準設定、1958年の国民皆保険の導入に伴い診療報酬としての薬価基準、1992年加重平均値による一定価格設定、2010年新薬創出加算など、薬価基準設定の変遷を経年的に概観し、1985年以降の製薬業界のグローバル化の影響等についても言及している。また、薬価制度の変遷に伴い寡占化する製薬業界の現状についても触れている。

以上、2題の座長は高橋保志先生が担当された。

## 演題 9 「福音書」に基づく病（やまい）と癒やしについて

演者： 伊藤あゆみ 野々垣常正（金城学院大学薬学部）

新約聖書の中の一書「マルコによる福音書」で述べられている病（やまい）として、「重い皮膚病（ハンセン氏病）」、「中風」、「盲」を取り上げ、キリストの教えの中から医療者のあり方、また現代の医療の目指す方向を示す記述を探り、その意味を提示している。「重い皮膚病」の癒しから、病める精神や社会性を含めた患者のすべてを看取る姿が、「中風」の癒しでは、病気だけではなく、患者が抱える問題に根本から携わる姿が、「盲」の癒しから、患者のこれからの人生の行く末を思いやり、QOLを考慮する姿が示されており、これは現代の医療の方向性を窺うことができるとしている。

## 演題 10 英国における The School of Pharmacy の創設とその背景

演者： 柳澤波香（津田塾大学非常勤講師・青山学院大学兼任講師）

ロンドン大学薬学部の前身である The School of

Pharmacy の設立に至る社会背景及び設立の経緯を紹介している。産業革命完了期に至り、諸科学が発展し、技術革新がなされ、衛生に対する意識の高まり、製薬業界も興隆している時に、Chemists and Druggists の教育は、徒弟制度の上であり、教育上の定式がなく、修練の質が低下し、薬に対する知識の不足も見られていた。そんな背景にあった1841年に、化学者、製薬業者が発起人になって、化学と薬学の進展、Chemists and Druggists の権益保護、薬学の統一教育の確立等を創設の趣旨として The Pharmaceutical Society が設立された。1942年に薬学校（The School of Pharmacy）の設立が決議され、早速、薬学の講義が開始された。当時の学校の運営、教授陣の陣容並びに教育内容も紹介され、知的専門職としての薬剤師（プロフェッション）の確立の目指した教育の始まりが伝えられた。

以上、2題の座長は関川 彬先生が担当された。

## 演題 11 大分県近代薬学史年表作成のためのメモ (1) 明治偏

演者： 五位野正彦（東京海道病院 薬剤科）

大分県の近代薬学史年表作成への端緒を付けるべく、国立国会図書館近代デジタルアーカイブを検索し、その結果を紹介している。大分県の薬業については、薬種（医薬品）輸入量の推移を解析し、その動向が海上輸送から陸上（鉄道）輸送への変遷と一致することを述べている。次いで、県内の薬剤師事情にも検索が進み、明治13年創立の大分県医学校と内務省衛生局の試薬師として赴任し、後に薬局長となる五十川徹夫の活躍と、医学校で制定された「病院規則」、「薬局規則」に記載されていた事項が紹介された。処方箋、院外処方箋交付の規定（病院規則）、また、医薬品交付時の患者への説明について、毒劇薬の疑義照会規定（薬局規則）が規定があったことが示され、現在において重要な薬剤師業務となっている服薬指導や疑義照会が明治期の、それも早い時期に既に実施されていたことなど、当時の病院、薬学の先進性に驚かされた。

## 演題12 後志の薬史(人物編)「アスパラガスの父」と称えられる薬剤師；下田喜久三とその生涯

演者： 小松健一、島森美光(北海道薬科大学)、  
西川 隆、吉沢逸雄(日本薬史学会)

私立東京薬学校(現東京薬科大)で薬学を修め、説得されてふるさとに帰った薬剤師、下田喜久三の生涯を紹介している。講演は、まず下田のふるさとである後志(しりべし)の豊かな自然がスライドに示され、次いで下田の業績紹介に移った。薬学のその素養をもとに農芸化学の分野にも知識も広げ、冷

害と施肥について分析し、肥料の多い畑ほど被害が深刻であること看破して処方に基づいた肥料使用法を提唱するなど北海道農業に大きく貢献し、冷害対策としてのアスパラガスの品種改良に努め、アスパラ作りを定着、商品化させ、「アスパラガスの父」と称されている。学識は広範に及び、北海道大学から農学博士が授与されている。農業分野に留まらず、「下田式肝油製法」を發明し、女子向けの栄養士養成を目指して北海道女実務学校を私立するなどの、下田のめざましい業績には圧倒された。

以上、2題の座長は冨所謙吉先生が担当された。

## 2013年度第2回理事会・評議員会の報告

編集委員長 西川 隆

日本薬史学会の2013年度第2回理事・評議員会は2013年10月5日(土)、2013年会の昼休みを利用して開かれた。議長は津谷喜一郎会長が務めた。主な議事内容は次の通り。

### 1. 日本薬史学会2014年会(福岡)の開催案内

次期年会長の笹栗俊之先生(九州大学医学部教授)から2014年会の開催案内が行われた。同年会は2014年11月22日(土)、九州大学医学部百年講堂で行う。翌23日(日)は「薬史ツアー in Fukuoka & Saga」を企画し、同大学医学歴史館や中富記念くすり博物館などの見学会が予定されている。またこの年会を九州で薬史学を広める機会としたいとの意気込みを示された。医学歴史館は薬剤部関係の資料も展示され、来年夏に完成予定であり、タイミングが絶好。11月の博多は気候もよく、空港や新幹線からのアクセスもよいので会員多数の参加を期待していると結ばれた。

### 2. 2014年度柴田フォーラムの開催案内

津谷喜一郎会長から、第7回柴田フォーラムは2014年8月2日(土)、御影雅幸先生(金沢大学薬学部教授)を世話人として開催するとの報告があった。会場は金沢大学角間キャンパス(石川県金沢市)自然科学研究棟。東京以外での初の企画なので是非盛会裡に開催させたいとの意向が述べられた。

### 3. 薬史学雑誌投稿規定の改定について

西川 隆編集委員長から、現在編集委員会で検討が進められている「投稿規定の改定」について説明があった。主な改定項目は、①査読制度ありを明示する、②日本文の要旨の新設、③キーワードの新設、④引用文献の記載方法にバンクーバー方式の導入、などであるが、常任理事会での最終決定を経て、第49巻第2号(2014)より実施する予定との報告があった。

### 4. 中部支部の発足後の状況について

本年4月に東海、北陸、甲信越地区を統合して発足した中部支部の河村典久支部長から、その後の活動状況について報告が行われた。その内容は、①支部例会が11月17日(日)に名古屋市の名城大学名駅サテライトで開催される、②第7回柴田フォーラムが2014年8月に金沢市で開催されるので協力する、などであった。

### 5. 薬史レターのweb上への掲載について

折原 裕広報委員長から、薬史レター創刊号からの全号全ページ(薬史学会通信を含む)をこのたび日本薬史学会 web サイトに掲載したので、薬史学雑誌(web サイトでは現在まだ目次のみ)とともに会員の皆様には是非活用して欲しいとの報告があった。ヤフーからの検索方法について画面を出して具体的に説明が行われた。



## 6. 国際薬史学会について

津谷会長から、2013年9月11～13日パリ(フランス)で開催された第41回国際薬史学会への出席報告があった。日本からは6名が参加し、3演題が提出された。次回は2015年9月8～15日にイスタン

ブール(トルコ)で第42回国際薬史学会が開かれる。

### ◇編集委員会からのお願い◇

上記の理事・評議員会の内容およびそれ以外の関連事項の詳細は、薬史学雑誌第48巻第2号の「会務報告」(青ページ)をご覧ください。

## 盛会な懇親会

恒例の懇親会は、午後5時半過ぎ会場を京王プラザホテル札幌に移し、会員をはじめ北海道医療大学学長新川詔夫先生、北海道薬剤師会副会長竹内伸仁先生など約50名が参加して開かれた。北海道支部の千葉博志先生の軽妙な司会のもと、日本薬史学会津谷喜一郎会長、吉沢逸雄年会長代理の挨拶で始まった。北海道の美味と支部の諸先生の心からの「お・も・て・な・し」を満喫、各テーブルで懇親の輪が広がった。旧制薬学専門学校時代からの名物「田螺踊り」まで飛び出した。北海道支部の関川 彬年会実行委員長の閉会挨拶で、午後8時近くにお開きとなった。北海道支部の皆様有難うございました。



懇親会風景

## 2013年度国際薬史学会拡大理事会に参加して

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

2013.9.11(水) - 13(金)にパリで開催された第41回国際薬史学会学術大会の前日9.10(火)に国際薬史学会(International Society for the History of Pharmacy : ISHP)の「拡大理事会」(Extended Executive Committee : EEC)が開催された。わたしはISHPの加盟学会である日本薬史学会(JSHP)の会長を昨2012年4月から務めており、ISHPの管理運営について知るべきと思いこの2年に1回の学術大会に合わせて開催される拡大理事会に参加した。

14:00からは「選取理事会」(Selected Executive Committee : SEC)が開催されており、EECはそれに引き継いで、15:30から、同じくフランス薬剤師会(Ordre national des pharmaciens)の古い風格のある建物で開催された。SECは、ISHPの規約

(Statutes)によれば会長、3人の副会長、会計、事務局長による理事会(Executive Committee : EC)に、2人の assessor (所轄なし。ISHPはベルリンで登録されている組織で、独語では Beisitzer)を加えて構成される。EECは、このSECのメンバーの他に、各加盟学会の個人会員の数によって、199名以下:1人、200-400名:2人、401名以上3人と参加者数が決められている。JSHPは330名と届けており2人参加できる。

オーストリアのKletter会長の挨拶や、議事案の採択につづいて、活動報告と財務報告があった。次頁の表に示す。収入は殆どが各加盟学会らの会費で、約1.2万ユーロ、日本からは一人1.5ユーロで2年間で約1,000ユーロで、全予算の約10%を占める。支

## Financial report 2012-2013 (2 years)

(€1 ≈ 130 Yen)

### Income

Member fee	10,716
Interest	918
Book sale	47
total	11,678

(individual member fee = €1.5)  
From JSHP: €1.5 x 330 x 2 = €1,000

Balance = -3,464

### Expenditure

Newsletter 2012	1,277
Newsletter 2013	1,478
Organization Congress Berlin 2011	378
Berlin Simultaneous inter- presentation 2011	5,113
FIP support Amsterdam 2012 Dublin 2013	1,722
Internet	2,400
Research fellow ship	2,500
Office	316
total	15,145

出は、年1回の Newsletter の発行が1,300-1400ユーロ、2011年の Berlin での学術大会には、約400ユーロの支援とは別に、約5,000ユーロの同時通訳代が支給されている。2012年のアムステルダムと2013年のダブリンの国際薬学連合 (FIP) の大会の薬史学関連の支援に合わせて約1,700ユーロ、Internet代に2,400ユーロ、Research Fellow への奨学金に2,500ユーロ、事務雑費に300ユーロ、合計約1.5万ユーロである。支出の1/3が2年に1回の学術大会の同時通訳代である。

2年間で約3,500ユーロの赤字である。次期の予算案として、この赤字対策としてこれまで国際郵便で発送していた *Newsletter* を pdf で各国の加盟組織に送る案が提出された。参加者にやや動揺があった。高齢者はパソコンを使わないのでメールで送るのは難しい、との発言が2人からあった。その場合は各国で印刷していただきたいとの回答である。JSHP は2006年に ISHP に加盟し、その加盟の手続きはわたしが国際委員長の時に行った。また以前の大会に参加した時から感じていたことを、この際だ

と思い発言した。以下にそれへの回答を含めて記す。

Q1：前回の Berlin大会の同時通訳代は本部から出しているようだがいつもそうなのか？また plenary session のみの通訳であり、一般口頭発表は通訳がない。

A1：そうである。

Q2：ISHP には公式用語というものはないのか？*Newsletter* の冒頭の会長の文章が、英仏独の3か国語で書かれていて読みにくく、2年に1度の大会も3か国語で普通の日本人は独仏語はほとんど理解できない。

A2：これまでも言語の件は議論したことがあるが、歴史的な理由から公式用語としてはこの3つである。時にそれ以外の言語が使われることもある。

Q3：ということは将来日本で大会が開催されたときにも日本語でよいのか？

A3：そうではない。

それなりの歴史と事情がありそうで、また主たる事項はどうも SEC で決定済みのようなので、それ以上この件の発言はやめにした。日本でも会員には高齢者が多くインターネットを使わない者もいる、だが日本国内の Newsletter は年に4回発行して郵送しており、ISHP から年に1回届く pdf を印刷して、そこに同封することは可能である、と付け加えた。

この EEC は、学術大会の開催されたパリ第5大学のある les Cordeliers からは大分離れた場所にて開催されたが、その後の同じ建物にある薬史学博物館のツアーは大変興味深いものであった。規約や新しい役員などは、ISHP の website (<http://www.histpharm.org/>) をご覧いただきたい。

## 第41回国際薬史学会 (パリ) 報告

日本薬史学会理事 順天堂大学医学部医史学研究室 辰野美紀

2013 (平成25) 年9月11日から13日まで、フランス (パリ) の医学校通りのコルドリエ (les Cordeliers) にて、第41回国際薬史学会が開催された。

今回の学会のメインテーマは、二つで、フランス革命前後に活躍したアントワヌ オーギュスト パルマンティエ (A.A.Parmentier 1737-1813)



の没後200年とフランス薬史学会 (SHP) (Societe dlhistoire de la pharmacie) の創立100年を記念した講演を中心に構成された。また、それに関係した軍事薬学や、18世紀から19世紀のフランスの医薬学を論じた発表がほぼ半数を占めた。講演は、ISHP (International society for history of pharmacie) 前会長で現 SHP会長の O.Lafont教授の会長講演と、招待講演は5題、一般講演は79題であり、日本からは、辰野の「近代医薬学発祥史 (第3報)」の1題だけであった。以下、三つに分けて講演について報告する。

### (1) パルマンティエに関する講演

A.A.Parmentier (1737-1813) は、一般にはじゃがいも (pomme de terre) を化学分析し、国立廃兵院 (Invalide) 病院の給食や当時の凶作への飢餓対策に効果を上げた軍陣薬劑師として有名だが、彼は、その他にもフランス革命前後の医薬農鋳から衛生などの広域にわたる研究や、廃兵院薬局長としての業務で、また、行政官としても、それこそ八面六臂の活躍をした。一般講演では、特に、J.Grave氏の“A.A.Parmentier と、N. Deyeux (1745-1837) の血液に関する研究”の報告によって、フランス独特の早期の生化学 (分析生物学) 研究の状況を知ることができ興味深かった。

### (2) SHP創立100年に関する講演

ルーアン大学教授 O.Lafont会長講演と SHP会員の T.Lefebvre招待講演を参考に SHP の創立から100年の歴史を概説しよう。SHP は、1913年2月1日に、パリ薬学専門学校 (現パリ第5大学薬学部) の、講堂 (Salle des Actes) にて、創立発起人3名によって創立された。その3名とは、フランス薬業協同体 (la Pharmacie Centrale de France) の会長の C.Buchet (1848-1933) と、元パリ薬学専門学校学長で図書館長であり1926年に創立した国際薬史学会のはじめからのメンバーであった E.H.Guirand (1884-1976)、及び、1903年創立のフランス医史学会 (SFHM) (societe francaise dlhistoire de la medicine) の会員であり (1938年に E.H.Guirand が書いているが当時の世界的薬史研究の牙城を率いていた) P.Dorveaux (1851-1938)

であった。また、創立メンバーは23名で、そのなかには、P.Dorveauxの友人であった、H. Schelenz (1848-1922) (ドイツ・薬学史) や、K. Sudhoff (1853-1938) (ドイツ・医学史。ライプティヒ大学医学史及び自然科学史研究所教授)、また E.Kremers (1865-1941) (アメリカ・薬学史) などの錚々たる外国の学者も名前を連ねている。創立時の会員数は、70名であった。しかし、次の年には、第一次大戦が勃発し、活動を休止せざるを得なかった。さらに、再開した後には第二次世界大戦によって、再び休止を余儀なくされることとなった。1964年に SHP が活動を立て直すことができ、1973年に、フランスで初めての国際薬史学術大会 (ICHP) (International Congress for History of Pharmacie) が開かれ、その後、第22回大会 (1975年) (パリ)、第32回大会 (1995年) (パリ)、今年の第41回大会 (2013年) (パリ) と過去3回のパリ学会を企画、開催することができている。多くの困難を乗り越えて現在に至っている。

### (3) その他

スイスのベルン大学の F.Ledermann教授の“ISHPの出版に見る認識論的小論”という招待講演によって、今まで知らなかった国際薬史学会の歴史を知ることができた。ここでは、彼の講演を軸に、少々私の解説を付けてまとめてみる。

国際薬史学会 (当時の呼称で、IGGP (Internationale Gesellschaft fuer Geschichite der Parmazie) は、1926年に創立された。第1回大会は、ドイツ系の国々 (ドイツ、オーストリア、スイス) の薬史研究者を核に、フランスの E.H.Guitad氏などのヨーロッパからの参加者を得て、オーストリアのインスブルックで開催された。また、第二次世界大戦が激化するに従って、徐々に研究者の出兵やスイスやアメリカへの亡命が増加するという困難に直面することとなった。ドイツに留学していたアメリカなどの学生や研究者も大量帰国した。戦争中の研究交流も停止した。戦後、1951年に、IKGPの発表論文を著作集としたもの (Veroeffentlichung der IGGP e.V.) (編集責任者 G.E.Dann教授) と、雑誌 (1951 - 1985) (Zeitschrift derIGGP) (Wissenschaftliche

Verlagsgesellschaft MBH, Stuttgart) は、規約に則って選ばれた編集委員達による編集方針によって公的な刊行物として出版された。(1985年以後は、さらに、R.Schmitz マールブルク薬学史研究所教授と W.Mueller-Jancke ハイデルベルク薬史博物館所長の尽力により、月刊 Apoteker Zeitung に年に2-3回の薬学史特集の別冊として研究成果を発表する場が確保された。) 1999年の第34回国際薬史学会(イタリアのフィレンツェ)での理事会決議により、公的に3か国語(フランス語、ドイツ語、英語)を採用すること。国際学会は、ISHP,IGGP,SIHP また、大会は、ICHP,IKGP,CIHP と表記すること。3か国語で列記した News letter を発行すること。また、国際学会の登録は、各国薬史学会の会員として一括加入すること(個人会員の登録と参加も可)。各国薬史学会はその登録会員数に応じて、学会の前日に開かれる理事会にデレゲートを派遣できる。デレゲートは、各国の学会員の総意を代表して、理事会の発言と採決の権利を持つ。さて、2001年に、スイスのルツェルンで国際薬史学会創立75周年の記念学会が祝われた。また、アメリカで初めての大会

(2005年)が開催され、さらに、ベルリンの壁崩壊後には、今まで参加が不可能だった東側陣営に属していた、ルーマニア(2003年)、ドイツのベルリン(元東ベルリン)(2011年)で、大会を持つところまで発展している。大会の発表者のレジメ、スライドやP.P.とフル原稿は、CDにして、発表者や次学会の参加者に配られていたが、現在では、学会のホームページで見ることができるようになった。今後のますますの研究交流が望まれている。



2013年 ICHP の講演会場にて  
内野、辰野、夏目(名城大学・薬)(撮影者)

## 第41回国際薬史学会「ポスターセッション」報告

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 内野 花

アジサイが咲く中庭をぐるりと囲む回廊で、ポスターセッションは行われた。発表当日は雨がしとしと降る肌寒い日であった。ドイツ語が2報告、フランス語が14報告、英語が27報告の全43報告で、日本からは小栗一輝氏らによる“The Scientific Analysis of Crude Drugs Inherited in Koan Ogata’s Medicine Chest”と、内野の“Forgotten Glory and Shade of Datura in Japan”の2報告であった。チェアマン無しのフリースタイルセッションで、目があった人に微笑みかけては‘We often say there is no rose without thorn. Don’t you think it is so true? Datura is beautiful, it is poisonous though.’と話しかけながらの発表であった。前大会に比べて会場が広

く、薬や毒、美の概念について聴衆一人一人とゆっくり議論ができた。所定時間が過ぎたあとも聴衆があったことは嬉しいハプニングであった。

大会テーマの戦争に因んだポスターが多いなか、LVMH研究所のF. ボンテ氏らの“Medicinal Uses of Orchids in Europe”と“Les Orchidés Médicinales dans les Ouvrages Européens Anciens de la Bibliothèque Flückiger”は、薬としての蘭に関する記述分析であり、挿絵を引き立たせるシンプルな色遣いのポスターは視覚的にも惹かれるものであった。研究成果の発表のみならず、自分と同じ視点の研究者と知り合える。これぞ学会参加の醍醐味、と感じ入った大会であった。

## 41<sup>st</sup> International Congress for the History of Pharmacy (Paris, France, 10-14th Sep. 2013)に参加して

大阪大学大学院薬学研究科 博士課程1年 小栗一輝

2013年(平成25年)9月10日～14日にフランス・パリ市のパリ第5大学で開催された41<sup>st</sup> International Congress for the History of Pharmacy(第41回国際薬史学会)に参加した。本学会では、フランス語・英語・ドイツ語の3言語のいずれかで講演や研究発表が行われ、ヨーロッパを中心に30以上の国々から約250人が集まった。私は、初めて外国で開催された国際学会に参加し、ポスター発表の機会をいただいた。今回の渡仏は大阪大学の「マルホ大学院生等海外派遣」に採択され、その海外報告助成と所属分野からの支援による。

会期中は天候に恵まれなかったが、会場内では熱い議論が行われた。私は、“The scientific analysis of crude drugs inherited in Koan Ogata's medicine chest”の演題で、大阪大学の源流である適塾の開設者、緒方洪庵が実際の診療に用いた薬箱(本学所蔵)の科学的解析に基づく全容について発表した。日本国内での学会発表は複数回経験していたが、英語スキルが拙いこともあり、緊張や不安と共に示説時間をむかえた。意外にも、会場のゆったりした雰囲気助けられ、これまでの学会よりもリラックスして発表を行うことができた。

1時間の示説時間中、6~7名の研究者から質問(発表内容以外も含む)や助言を受けた。特にヨーロッパ系に多かったのが薬剤師資格の有無の質問で、肯定すると、より真剣に説明に耳を傾けてくれたことが印象深かった。ヨーロッパ圏では「薬剤師」の職能に対する信頼度が高いと聞いていたが、それを実感できた貴重な体験となった。今後、自分の「薬剤師」の資格が有名無実とならぬよう、全力を尽くしたい。

本学会は、講演・研究発表以外に複数のFringe Eventが予定されていた。その一つとしてパリ第5大学の博物館:Museum of Materia Medicaを見学した。そこには、ヨーロッパだけでなく、アフリカ・

アジアなど世界各国から蒐集された膨大な生薬標本(1800年後半～1900年前半)が展示されていたが、標本の展示が本館の主要な役割であるとの説明を受けた。博物学的標本資料が温故知新の情報を有することを日々の研究から実感している私は、貴重な生薬遺産が研究されずに保管されているという現実が残念でならない。

本学会の参加者は、私と同年代や学生は数えるほどで、定年後や名誉教授的立場の研究者が多いように感じた。私見だが、薬史学研究の真髄を学び継承するためには、比較的若年期からこのような学術的会に参加することが有益であると考え。同時に、広い年代層が参加しやすい環境づくりをお願いしたい。例えば、英仏独3言語の使用は参加を容易にするが、講演要旨集も3言語のいずれかで記載されており、特にアジアからの参加者にとって各講演内容の理解を困難にしている。同時通訳が用意されていたが、専門用語に関する翻訳には限界がある。また、パリ開催の今回は当然フランス語が主で、多くの事務連絡に混乱が生じ、事務手続きや情報入手に難儀した。少なくとも講演要旨集は英語で統一することを強く希望する。

最後に、本学会でお目にかかり、ご指導・ご助言



ポスター発表会場にて



をいただいたすべての方々に深謝する。そして語学力の重要性、自らの語学力の未熟さを痛感したこと

を今後の課題として研鑽しようと思う。

## 中部支部だより

# 日本薬史学会・中部支部例会報告

日本薬史学会中部支部長 河村典久

日時：2013年11月17日（日）13：30～19：00

場所：名城大学名駅サテライト・多目的室

開会あいさつ：13：30

中部支部長 河村 典久

講演会：13：40～

演題1：『内藤記念くすり博物館所蔵の中国明時代の薬研例について』

○奥田 潤（名城大学薬学部）、  
森田 宏（内藤記念くすり博物館）

演題2：『伊藤圭介と植物図説雑纂』

○河村典久（金城学院大学非常勤講師）

演題3：『キニーネ —歴史に影響を与えた分子—』

○桐原正之（静岡理工科大学）

懇親会：17：00～

名城大学名駅サテライト・ラウンジ（懇親会参加費1,000円）

講演会には北陸地区、関東地区からの参加を含め10名であったが、内容は充実し各40分ほどの講演に対して15分ほどの活発な質疑応答が行われた。講演会終了後、支部としては初めての懇親会を行ったところ7名の参加を得て親交を深めることができた。

各講演の演題と要旨を以下に掲載する。

演題1：『中国の薬研の歴史 —後漢より明の時代まで—』

○奥田 潤（名城大学薬学部）  
森田 宏（内藤記念くすり博物館）

### 【要旨】

東洋独特の薬物粉碎器である薬研の歴史はよく分かっていない。

日本より古い文化をもつ韓国の薬研について調べ

たところ、もっとも古い薬研は国立扶餘博物館所蔵の薬研があり、赤さびた鉄製の出土品で10世紀のものであることが分かってすでに報告した（2013札幌年会）。

筆者らは韓国よりさらに歴史の古い中国の薬研の歴史について調べた。

後漢時代（25～220 A.D.）には、薬研の前身と思われる礮の使用について天野元之助による記載がある（中国農業史研究、総研、1962）。当時すでに直径数mの石の円盤の円周部分に溝を掘り、そこへ石、穀物などを入れ、直径1.5m近くの円盤の中心に棒を差し込み、牛または馬を動力源として、その上を回転させ粉碎した（礮は英語でEdge runnerと呼ぶ）。

2005年に「中国の暮らしと夢」の展覧会が日本各地で開催され、その図録には、後漢～六朝時代（25～589 A.D.）の褐釉陶の薬研（個人蔵）の写真が掲載されている。薬研は礮の円周の一部を直線化、小型化したものと考えられる。

隋の時代（589 A.D.）に河南省の張盛の墓に礮の模型が副葬品として埋葬されていたが、1959年に発掘された。

愛知県陶磁美術館には、宋時代の薬研と唐時代晚期（9世紀）の薬研の一部が所蔵されている（森達也氏の写真提供）。

今回、「大明正徳年製」と書かれた薬研（陶器、長さ33cm）が内藤記念くすり博物館から見出された。明の正徳年は1506年～1520年（和暦では永正3年～永正17年）、室町時代後期に相当するが、今後本薬研の年代、画かれている図柄について詳細に検討したいと考える。

日本の薬研については、年代の確定できる古い時

代の薬研は見つかっておらず、調査中であり、中村惕斎著訓蒙図彙（きんもうずい）（1695年版）に当時の薬研が図入りで紹介されている。

御協力いただいたくすり博物館学芸員稲垣裕美氏に感謝する。

## 演題2：『伊藤圭介と植物図説雑纂』

○河村典久（金城学院大学非常勤講師 日本薬史学会中部支部長）

### 【要旨】

伊藤圭介は名古屋出身の博物学者で、長崎出島にやってきたシーボルトの下で植物や医学についての知識を受けた。明治に入って今の東京大学の植物園である小石川植物園で植物の研究をし、わが国の最初の理学博士号を得ている。

医師である伊藤圭介は、動物、植物、鉱物等様々な分野に興味を有し、生涯にわたって身の回りにある資料を収集していたと思われる。中でも植物に関する資料は、現在では収集が困難なものが含まれ、のちにそれらの資料は切り貼りをして植物図説雑纂として残した。しかし多くの資料は彼の99歳という高齢になってもまとめることは出来ず、三男の譲に托することとしたが、明治12年に29歳で急逝し

てしまった。残された四男恭四郎に托そうとしたが学問には興味がなく、孫の篤太郎に托することとなった。圭介の死後、圭介の膨大な資料は恭四郎や篤太郎の手に分散して保管されることになり、現在では雑纂資料は多くの機関に寄贈されることになって、全体を把握することは困難である。

資料の多くは国会図書館に植物図説雑纂として二つの資料がある。植物名のイロハ順にまとめられているが、植物の種類としてまとめたものは『錦窠禾本譜』など『錦窠〇〇譜』として別資料として保管されている。錦窠とは伊藤圭介の雅号である。植物図説雑纂は、ほかに名古屋の東山植物園と名古屋大学付属図書館にも保管されており、これらの資料を集大成すると、ほぼ全容を見ることが出来るかもしれない（表参照）。

一連の雑纂の内容を見ると、彼の手元にあった貴重な資料を惜しげもなく切り貼りしており、近世の植物に関する資料が載せられていることから、貴重な資料集としてみる事が出来る。演者も国会図書館や東山植物園の関係資料を調査してきたが、あまりにも膨大な資料で、とても手におえるものではないものであることが分かった。演者がこれまでに調査した目録は、2013年に科学書院から、「近世植物・

表 伊藤圭介の作製した印葉図を含む『植物図説雑纂』関係資料

資料名	冊数（丁数）	所蔵機関	資料番号
『植物園説雑纂一』	17	国会図書館	別11-33〈特7-758〉
『植物図説雑事』	122→254*	国会図書館	別6-9
『植物図説雑事 [一]』	1 (33)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-90
『植物図説雑纂 [二]』	1 (35)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-91
『植物図説雑纂 [三]』	1 (35)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-92
『植物図説雑音 [四]』	1 (37)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-93
『植物図説雑纂残一』	1 (17)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-94
『植物図説雑纂残二』	1 (21)	東山植物園伊藤圭介記念室	2-95
『錦窠植物図説』	144	名古屋大学付属図書館	伊藤文庫-1

\*：この資料はその後分冊整理されて、現在254冊になっている。

動物・鉱物図譜集成 第 XXIX 伊藤圭介稿『植物図説雑纂』(IV)」の別冊目録として発行されている。

伊藤圭介の収集した植物の全体像を調査する試みは、磯野直秀氏が精力的に行ってきたが、志半ばで急逝されてしまった。関係資料は多方面にわたり、しかも多機関に分散していることから、全容を解明することは極めて困難となってしまった。

### 演題3：『キニーネ —歴史に影響を与えた分子—』

○桐原正之（静岡理科大学）

#### 【要旨】

キニーネは、古くから用いられているマラリア治療薬として有名である。しかし、それ以上にキニーネは歴史に様々な影響を与えてきた。特に、近代以降の化学工業や有機化学に与えた影響は目を見張るものがある。今回は特に、有機化学に与えた影響を中心に解説したい。

#### (1) キナとキニーネ（シンコナルカロイド）

キナ（南米産の木）の樹皮は、南米地方にマラリアが伝搬されるはるか以前から、南米のアンデス地方で解熱剤として用いられていた。南米地方にマラリアが持ち込まれると、すぐにキナの樹皮はマラリアの特効薬として使われるようになり、ヨーロッパへと伝わった。しかし、南米産のキナの木は枯渇の危機にさらされたため、ヨーロッパ各国は、キナの木を栽培に血道を上げた。膨大な努力にもかかわらず、栽培は難航を極め、唯一オランダのみが、植民地インドネシアでの栽培に成功した。これによって、以前はマラリアのせいで阻まれていた、ヨーロッパによるアフリカの植民地化が可能になった。

キナからのキニーネの単離構造決定には多くの化学者が関わったが、ノーベル化学賞受賞者のプレログによって、1944年によりやくキニーネの立体構造が決定された。

#### (2) パーキンとキニーネ

イギリスの化学者パーキンは、キニーネを合成しようと試み、その研究の途中でアニリンを酸化させ

た生成物の混合物中から、偶然に紫色の染料であるモーブを見出した。パーキンはモーブの工業化に成功し、これから合成染料工業が発展していった。

#### (3) ウッドワードによるキニーネの全合成？

キニーネの最初の全合成は、1945年に20世紀最大の有機化学者と呼ばれた、アメリカのウッドワードらにより達成されたと言われてきた。しかし2001年にキニーネの選択的合成に成功したストークは、これに疑問を呈した。

ウッドワードらが実際に合成したのは、キニーネの分解物のキノトキシシンであった。しかしキノトキシシンはキニーネに変換可能であることを、1918年にラーベらが報告していた。そこでウッドワードはキノトキシシンの合成成功をもって、キニーネの合成に成功した（形式全合成）と報告していた。ストークはラーベらの報告が詳細ではなかったため、キノトキシシンからキニーネへの変換は疑わしいと主張したのであった。

この問題は、2008年にラーベらの報告を基にして、キノトキシシンからキニーネへの変換反応の追試実験が成功したことにより決着をみた。

#### (4) 不斉触媒としてのキニーネ（シンコナルカロイド）

キニーネと、その疑似エナンチオマーの関係にあるキニジン（抗不整脈薬）は、現在の有機化学分野において、不斉合成触媒の基本骨格として広く用いられている。シンコナルカロイドから合成された各種の不斉合成触媒を用いる、非常に多くの不斉反応が開発されてきており、それらの不斉合成触媒の多くは、試薬メーカーから市販されるようになってきている。シンコナルカロイドは、両エナンチオマー（正確には疑似エナンチオマー）が入手用意であり、変換可能な官能基が多数存在するため、各種不斉合成触媒を開発するにはうってつけの化合物群である。

キニーネやキニジンは、現代有機合成化学においても、極めて重要な役割を担っているのである。



〔Book紹介〕

草原克豪 著

「新渡戸稲造 1862-1933 我、太平洋の橋とならん」

B5版 529頁 4,200円(藤原書店)

2012年7月、新渡戸稲造生誕150年を記念して出版された。本書の帯には、“真の国際人”初の全体像と記されている。「37歳の時、『武士道』で国際的に名を馳せ、その後も旧制の一高校長として、南原繁、矢内原忠雄、河合栄治郎ら多くの俊英を輩出するなど教育の分野でも偉大な業績を残した。国際連盟事務次長としてはユネスコにつながる仕事、帰国後は世界平和の実現に心血を注いだ」とある。

新渡戸博士の「良き国際主義者は、良きナショナリストでなければならず、またその逆でもなければならない。・・・自分の国に忠実でない人は、世界正義に忠実であるかどうか頼りにならない。人は、自分の国に尽くすことによって国際主義のために役立つのである。一方、ナショナリストは、国際的感覚を身につけることにより、自分の国の利益と名誉の発展にもよく貢献することができる」の言葉は、現代の我々にも生き生きと響いてくる。

本書の202～204頁には、1900年新渡戸が旧知の星一に、パリの街でばったり会ったストーリーが記されている。福島から星雲の志を抱いて米国に渡り、苦学しながら後に星製薬や星薬科大学を創設した星は、コロンビア大学に留学中、学費稼ぎのために『日米週報』という日本語の新聞を発行した。その記事を書くため

に、折から『武士道』の原稿を書き上げて東部にやってきた新渡戸にインタビューした二人の出逢いは大きな感動を与えてくれる。

216～218頁には、1902年米国から一時帰国した星が、東京の赤十字病院に入院していた後藤新平を訪れ、その後台湾に帰任する後藤に同行し、新渡戸と再会した話も紹介されている。

薬史学会2012年会の一般講演5で、三澤美和副会長が「新渡戸稲造と星一の交流」のタイトルで発表され興味深く拝聴した。実にタイムリーな本書の刊行である。

(森本和滋)



編集委員会からのお願い

- 著作権の委譲：薬史学雑誌掲載論文の著作権を、日本薬史学会に委譲することについてご承諾をいただけない場合は、お手数ですがその旨を2013年12月31日までに、事務局宛書面または電子メールにてご連絡下さいますよう、お願いいたします。詳細は、薬史学雑誌（第48巻第1号および第2号）または薬史レター（第67号）をご参照下さい。
- 薬史レターへの投稿：薬史に関するエピソードをはじめニュースやBook紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。紹介の図書は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号（第70号）は2014年3月発行予定（締め切りは1月末日）です。

## 薬史往来 私の薬史研究との関わり

日本薬史学会名誉会員 山川浩司

東大薬学科の菅澤重彦研究室で有機合成の研究をしていた戦後の時期(1950-53年)。当時、研究室助手の辰野高司さん、その後、石坂哲夫さん(薬学会事務局長)の指導で「新しい薬学について」について議論した。1953年4月に慶應義塾大学医学部の薬化学研究所(柳田昌一教授、朝比奈先生の門下、柴田先生の兄弟子)に移籍し、当時、最先端の有機立体化学研究の開拓を行った。また伊沢凡人さんの「薬学を愛する者の会」、薬史学会の創立に参加した。慶應での「有機化合物の反応と立体化学研究」で1958年9月に東大で学位を得た。その後、1959年に八幡製鉄(株)基礎研究所(所長、元東大教授、水島三一郎)に移り、有機鉄化合物から純鉄の製造研究と非ベンゼン系芳香族有機金属化合物フェロセンの研究を行った。

1964年の東京オリンピックの10月開催時に市谷船河原の東京理科大学薬学部に移籍した。36歳になったばかりの若造の薬品製造化学教授であった。生薬学の長沢元夫氏と同時着任し、辰野、長沢、山川の三名で「薬学概論」の講義を開講した。これが「薬学教育論と医薬品産業論」の原点になった。薬学会年会(京都市および岐阜市)の薬学史シンポジウムの特別講演は薬史学雑誌に掲載され、「有機化合物の分光學、分離分析の総説」を薬史学雑誌、化学の領域誌などに掲載した。この日本の薬学史論文に石坂、辰野両先輩から賛辞の手紙は有り難かった。また天然物合成研究では形式的全合成した天然有機化合物は100種を越えた。理大薬に移ってから10年かけて合成したスーパーフェロセノ

ファンで米国化学会から評価を受けた。

薬史学会の川瀬理事から「薬史学通信」を発行したから復帰を要望され、これに応じて薬史学会の新事業の「薬史学会四十年記念号」およびライトブルーのカラー装丁にした「薬史学会五十年史」を作成した。この記念誌に薬史学雑誌や薬史学通信、年会、講演会などの記録を高橋理事と分担した。その後、当時の趨勢として学会誌を大判のA4判とし、同時に「薬史学通信」もA4版の「薬史レター」に改編した。

当時は学会誌と会誌などの包装と発送作業は学会誌刊行センターの会議室で当時の常任理事のみで行っていた。この時の自由論議は楽しく有益であった。「薬学会史年表」は川瀬名誉会員の担当を引き継ぎ、1991年から2010年に渡り4回20年常任理事の方々と協力作成した。

新世紀の2001年から薬学会へ依存していた「薬史学会年会」を本会独自で主催することを提唱。新世紀のスタートになる2001年に東京理大薬学部で「薬史学会年会」を海保氏の協力を受けて開催し、以後、毎年秋に薬史学会年会として現在に継続している。

筆者の「国際薬学史—東と西の医薬文明史—」2000年(南江堂)には、薬史学会の方々との数回の海外の見学の知見を盛り込んだ。また多数の学協会に関与して60年を越え、薬学教育や薬史研究などの多数の論説を書き専門の研究論文以外の論説は200編を超えた。最近が高橋名誉会員に要望されて同学の方々と毎回テーマを決めて勉強会(通称、山川塾)での楽しい討議が続いている。

### 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第69号 2013年12月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>